

## 達成動機と達成行動

速 水 敏 彦

### I 達成動機の測定について

#### (1) T A Tによる測定法の検討

目的：McClelland, D.C (1953) 以来，達成動機の測定は主にT A Tによってなされてきたが，その妥当性，信頼性については現在でも様々に評価されている。そこで，まず中学生の達成動機を測定するのに，T A Tを用いて妥当性のある結果がえられるか否か検討する。

被験者：中学2年生 2クラス

手続き：次のような data を収集した。

集団T A Tによる達成動機得点 図版は4枚でneutral条件下で記述させた。scoring は A 1, T 1, U 1 の3分類に従った。

◎他者評定値 達成動機の社会的に望ましい表出と社会的に望ましくない表出を考え，それぞれ5項目ずつもつて，それぞれに誰が該当するか，クラスの同性の中から3名ずつ書くようにゲスフー形式で尋ねた。

◎促進不安と抑制不安 Alpert, R & Haber, R.N. (1960) のAAT (Achievement Anxiety Test) によった。

◎その他に知能指数，成績，成就値

結果と考察：各測定値の関係は表1に示すとおりである。この結果から，T A Tによる達成動機得点は他者評定値や成就値，AATの促進不安とも高い正の相関は認められずT A Tによる測定の妥当性は低いことが明らかになった。

#### (2) A M I (Achievement Motive Inventory) の作成

T A Tにかわる達成動機を測定するものとして，質問紙A M Iの作成をこころみた。項目の作成にあたっては，従来から質問紙法の難点とされてきた項目内容のもつ社会的望ましさを (social desirability) を除去するために，社会的望ましさに関しては等価と考えられる項目を対提示する方法をとった。そのような項目を40項目作成し，中2，男子169名，女子186名に実施し，水野 (1970) による自動項目分析により，一次元尺度として $\alpha$ 係数の最も高くなる27項目を新尺度A M Iとして選んだ。この尺度の信頼性に関しては再検査法により，.91をえた。また妥当性については，教師の評定と生徒間の評定をもとにしたが，評定値の高群，低群の間にはA M Iのscoreに有意差がみられた。

### II 達成対象について

目的：potential な達成動機の強さは文化的，社会的背景のちがいをこえて測定しうるものと考えられるが，現実での具体的な達成行動の方向は環境的な要因に規定されざるをえない。そこで，ここでは中学生にとっての達成対象はどのようなものであり，達成動機と達成対象の選択にはどのような関係があるか，また，各達成対象への興味，要求水準，重要性についてはどうかも合わせてみてみようとする。

#### (1) 第一次調査

最初に，中学生の達成対象にはどのようなものがあるかを調べるために，中2，2クラスを使って，自由記述法により，各自の達成対象を書かせた。

#### (2) 第二次調査

第一次調査で104の達成対象が集まったがそれをまとめて50にした。そして，それぞれの達成対象を選択しているかどうかを中2，男子169名，女子186名に尋ねたこの結果から数量化の方法3により達成対象の分類をこころみた。2軸までのそれぞれの数値をプロットしたのが図1である。この結果から中学生の達成対象は，次の5つに分類できるとみなした。

I型(++) 男子向き達成対象

II型(-+) 知的，教養的達成対象

III型(--) 女子向き達成対象

IV(+/-) 運動，感覚的達成対象

V型(多くの人が選択しており原点付近に位置するもの) 娯楽的達成対象

#### (3) 第三次調査

ここでは，中2，男子136名，女子110名に，A M Iを実施し，30項目から成る達成対象の選択の度合，興味，要求水準，重要性について5段階評価で尋ねた。この結果，達成対象の型ごとにみた達成対象の選択と達成動機との関係は全部正の相関があった。そしてこのことは達成動機の高い人ほど，多くの達成対象を選択していることを意味していた。型ごとにみると，男女ともII型との相関が最も高く，それぞれ .420, .418 であった。これは，中学生にとって勉強が生活空間の中心的なものとなっていることからしても当然であろう。また女子だけについては，裁縫をするとか料理をするとかを含んだIII型とも .331 というかなり高い相関があり，中学生段

昭和46年度修士論文概要

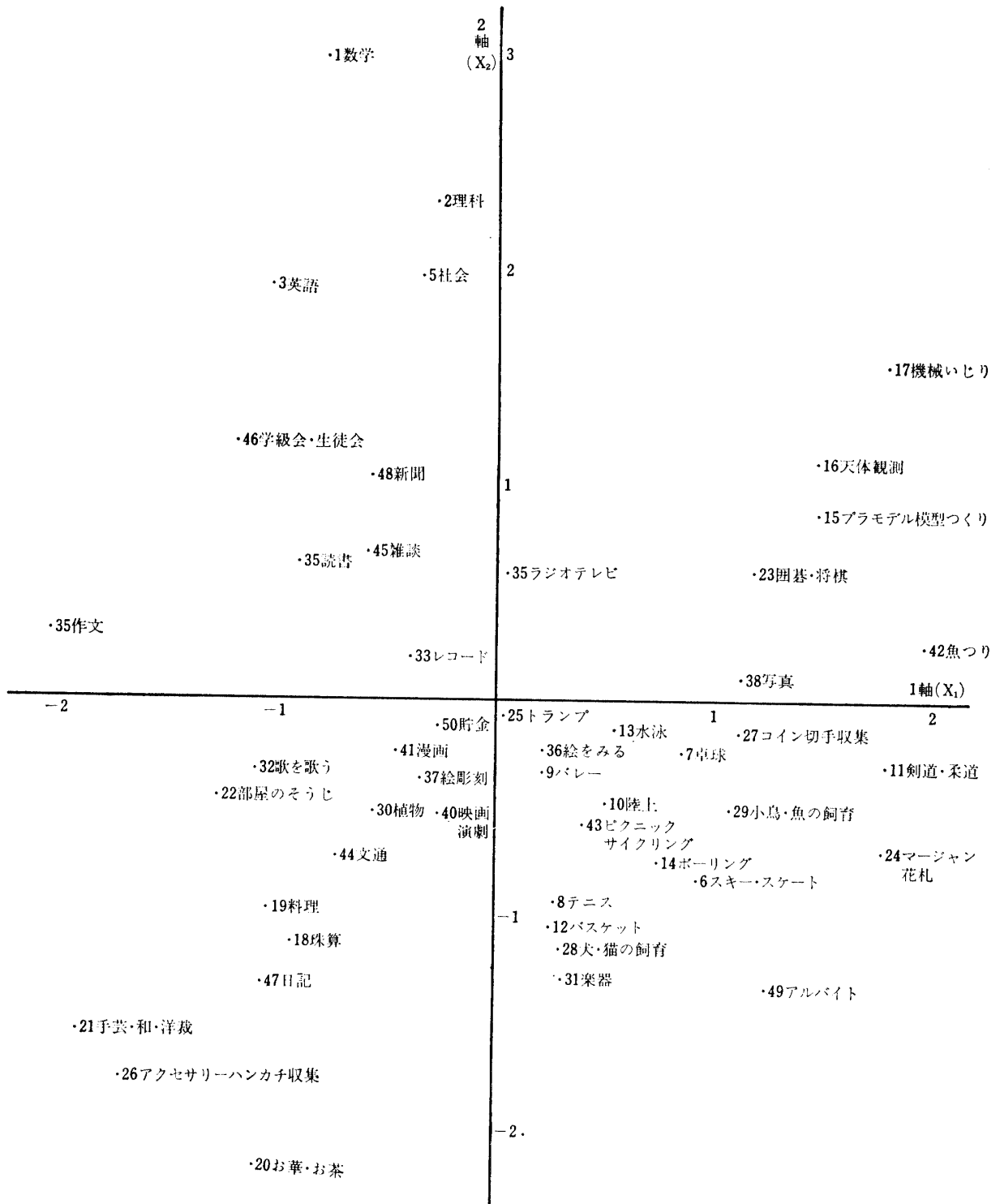


図1 達成対象の分類 (数量化の方法3による)

達成動機と達成行動

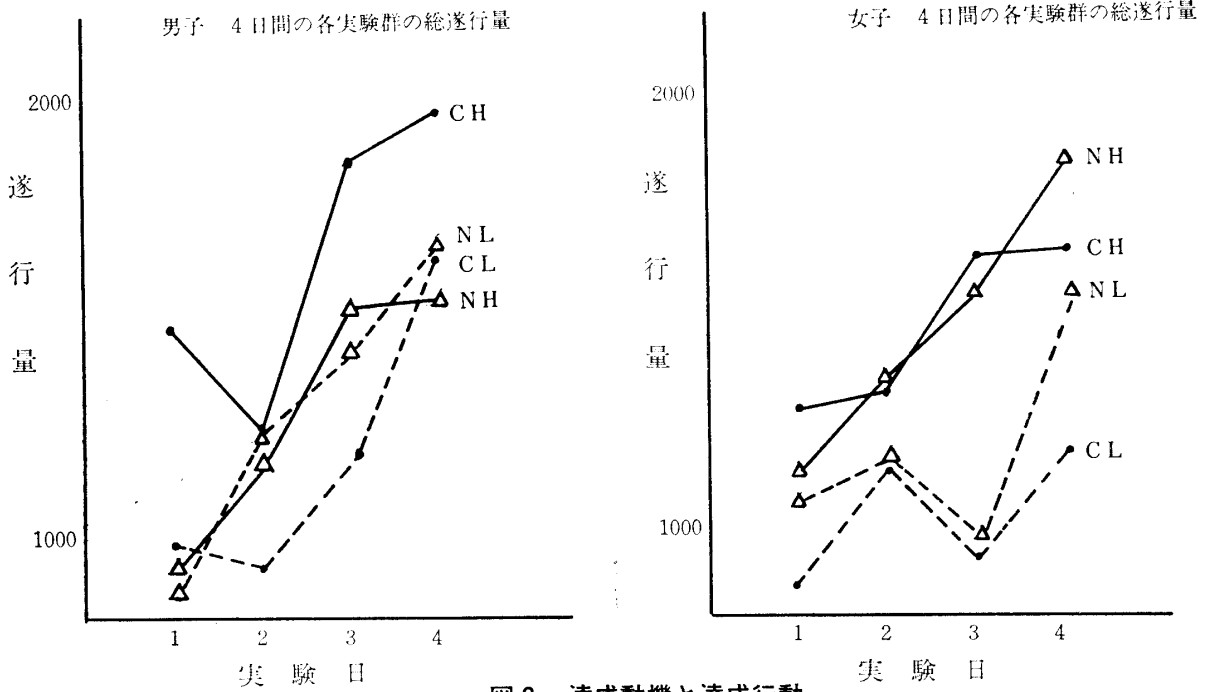


図2 達成動機と達成行動

表1 諸変数間の相関係数

無相関検定 \*\* P < .01  
\* P < .05

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
①社会的に望ましい評定									
②社会的に望ましくない評定	.667**								
③総評定	.873**	.871**							
④T・A・T	.105	.036	.069						
⑤A・A・T 促進不安	.400*	.328*	.367*	.114					
⑥A・A・T 抑制不安	-.237	-.127	-.129	-.114	-.291				
⑦知能偏差値	.721**	.468**	.633**	-.063	.312*	-.294			
⑧成績	.849**	.623**	.807**	.076	.351*	-.236	.783**		
⑨成就値	.356*	.306*	.390*	.206	.144	-.196	-.132	.502**	

	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨
①社会的に望ましい評定									
②社会的に望ましくない評定	.453**								
③総評定	.823**	.792**							
④T・A・T	.340*	.173	.231						
⑤A・A・T 促進不安	.225	.234	.219	.233					
⑥A・A・T 抑制不安	-.282	.089	-.196	-.236	-.056				
⑦知能偏差値	.451**	.337*	.497**	-.031	.218	-.325			
⑧成績	.784**	.470**	.736**	.232	.291	-.407**	.761**		
⑨成就値	.383*	.101	.237	.275	.077	.032	-.440**	.186	

階でもこの種の達成対象は女子にとって主要なものとなっていると思われる。さらに、興味、要求水準、重要性を達成対象ごとみたところ、Ⅱ型の達成対象に属するものや、女子でのⅢ型の達成対象に属するものの重要性や要求水準は、他の達成対象に比して高いものであることがわかった。逆に達成動機との関係が最も低く、有意な相関には至らなかったⅤ型の達成対象ではそれらは低かった。興味の一般的な高さとの関係については一致した傾向はみられなかった。また、それぞれの達成対象に対する興味、要求水準、重要性の評価の仕方には個人差もみられるわけであり、達成動機の高い人の方が、それらを一般的に高く評価する傾向があった。

### Ⅲ 事態差について

目的：達成動機が高い、低いといっても行動の生起する事態によりその動機の喚起のされ方が異なると考えられる。ここでは、他の人たちと対面して課題を遂行する集団事態と、一人だけで課題を遂行する個人事態では、達成行動としての **performance** がどのように異なるかを検討することを目的とする。達成動機の高い人にとっては、集団事態では、自分と同じように課題を遂行する他者の存在により競争意識が喚起され **performance** は個人事態の場合よりも高まると考えられる。しかし、達成動機の高い人では、集団事態にあっても、あまり動機は喚起されず、個人事態の場合とほぼ等しいと考えられる。

被験者：AMIを男子93名、女子98名に実施し、集団事態達成動機高（GH）群、集団事態達成動機低（GL）群、個人事態達成動機高（IH）群、個人事態達成動機低（IL）群の4つの実験群を男女とも8名ずつで構成した。なお知能は各群ほぼ等しかった。

手続き：課題は達成対象の分類に従えば、Ⅱ型に属すると考えられる知的作業課題、査照検査、逆写検査、置換検査の3課題で、それぞれ10枚ずつのつづりになったものであり、被験者は3つの課題を適時、自由に選択できた。実験は毎日30分間、4日間にわたって実施され

た。また、実験者による **extrinsic motivation** を除去するため、実験者は課題遂行中はその場に居合せなかった。

結果と考察：各実験群の総遂行量は図2にみるとおりである。男子の場合は、ほぼ仮説を支持する結果となっており、4日間ともGH群の総遂行量は高くなっている。しかし、女子の場合には、まったく事態差による影響がみられない。これは女子の達成動機は喚起されやすく、事態のいかんにかかわらず、実験に参加するということだけでどの実験群も同じように動機が喚起されるためと思われる。（この解釈は後の内観報告の結果からもほぼ支持される）。また、3種の課題の遂行量を別々にみると、男子では逆写検査が最も多く遂行されており、女子では査照検査が最も多く遂行されてあった。ここまでの分析は、どこまでやってあったかの遂行量だけで問題としたが、誤りについても分析を行ない、総誤答率を求めた。それによると、男子の場合も女子の場合の、GH群、GL群、IH群では10%前後であったが、IL群だけは20%以上もの誤答率を示していた。図2でみたように達成動機の高い場合はIL群の方がGL群よりも遂行量はむしろ高かったが、他者の存在しない事態では、他者の進行状況がわからずそのことが不安となって、量にだけ関心がむき、誤りが多くなったのではないかと考えられる。

さらに吟味実験Ⅰでは、事態のうけとめ方についての内観報告をとることにより、男子のGH群は他群に比べて強く競争意識を喚起されていることがわかった。また女子についてはCH>CL>IH>ILの順で競争意識は高かったが、その間にそれほど大きな差異はなかった。

吟味実験Ⅱでは、査照検査、1課題のみを指定して与えた場合に、男子では、達成動機の高い群の方が低い群よりも高い **performance** を示すことが明らかになった。前の調査から査照検査は男子にとってつまらない課題としてうけとられているものであり、実験的研究での課題のもつ意味の重要性が示唆された。